



*Moonlight*  
**Island**  
AUGUST 17, 2005

## 第1章

---

東京都千代田区一番町の通りに面する、8階建ての雑居ビルの3回と4階のフロアにある出版社、草案社。

その草案社が出版している、月刊<ミスト>編集部に水落圭介は呼ばれた。水落圭介は30歳で、フリーのルポライターを5年やっている。

いろんな雑誌から依頼があるが、月刊<ミスト>編集部の仕事もその一つだ。月刊<ミスト>は、国内外の不可思議な事件・事象など、オカルト的なネタを主に売りにしている雑誌だ。発行部数は12万部。部数は決して多くは無いが、コアなファンに支持されている。

この日も、何かの取材の依頼だろうと、水落圭介は思っていた。

月刊<ミスト>編集部は3階にあった。

水落圭介はエレベーターを使わず、階段を登った。

狭い廊下を少し歩くと、右手に月刊<ミスト>編集部がある。

鉄扉には小さな文字で月刊<ミスト>編集部と

ステンシルされている。水落圭介は、その重い鉄扉を開けた。

編集部は10平米ぐらいしかない狭さだ。

机は4つ。その内、二つには編集者が座って、パソコンを見つめながらキーボードを忙しく叩いている。

西の壁際には大きな本棚があって、<ミスト>のバックナンバーや、資料と思われる書籍が整然と並べられている。

そして、一番奥まった窓際を背にして、

月刊<ミスト>の佐藤編集長のデスクがあった。

デスクの上にはA4サイズのノートパソコン、ペン立て、その他、取材ノートのような冊子が20冊以上も積み上げられている。

最初、佐藤編集長は水落圭介の来訪に気付かず、窓から見えるビル街を眺めていた。

「佐藤さん、水落です」

水落圭介は佐藤編集長の背後に声をかけた。

佐藤編集長は少し驚いたが、圭介の顔を見て複雑な笑顔を見せた。

見ようによっては無理に笑顔を作っているようにも見える。

おや？と圭介は思った。

佐藤編集長は身長175センチ、50歳を少し越えた男だが、少々メタボな体型をはずせば、角刈りの髪は、定期的に染めているのか黒々としており、年齢相応の顔のしわはあるが、快活で昨今の根暗な若者より、はるかにエネルギーで、バイタリティのある人物なのだ。

その佐藤編集が、浮かない表情をしている。仕事の依頼で、こんな顔をする編集長は初めてだ。

「水落君、まあかけたまえ」

佐藤編集長はデスク前の事務用チェアをすすめた。圭介はそのチェアに座り、背もたれに仕事用のショルダーバッグをかける。

「ちょっと面倒な仕事になるかもしれないが、引き受けてくれないか？」

佐藤編集長は開口一番、強い語気を込めて言った。

その言葉を聞いて、今までタイピングしていた二人の編集者の手が、一瞬止まる。

圭介は背中に、二人の編集者の視線を一時感じた気がした。<sup>いつとき</sup>だが、二人はすぐに何事も無かったかのように、仕事の作業に戻った。

「はあ、それは仕事の内容次第ですが・・・

僕にできるような仕事なら、喜んでお引き受けしますよ」

水落圭介は暗い雰囲気を払拭するような、努めて明るい声で言った。

「実はある島に取材に行った記者が、2週間前から行方不明でね。

その記者っていうのが、キミも知ってる桜井君だ。」

佐藤編集長の口調は重い。両手を組み合わせて、親指で眉間を擦っている。それは佐藤編集長が動揺している時のクセだ。

桜井章一郎のことはよく知っていた。

何度か、取材にも同行したこともある。

彼は水落圭介と同じ30歳で、オカルト的なことが、大好きな男だ。

その点で言えば、この<ミスト>編集部には就いたのはまさに天職を得たというところだ。

その桜井章一郎が行方不明？取材中に？

「警察へは捜索願いを出したんですか？」

水落圭介は率直なことを訊いた。

「ああ、出したよ。でもその島って言うのが、遠方でね。地元の警察も積極的に動いてくれる気配は無い……」

「でも、その島で行方不明になったんでしょ？  
だったら、レスキュー隊とか動かせるんじゃない？」

「それがそうもいかんのだよ。  
そもそも桜井君がその島で行方がわからなくなったっていう証拠が無い。  
最後に連絡があったのは鹿児島県のホテルからでね」

佐藤編集長はため息をする。

「鹿児島……それで、僕に桜井君の行方を調べてくれということですか？」

「そうだ。引き受けてくれるか？」

佐藤編集長は懇願するような視線を、圭介に向けた。

いつもお世話になっている編集長の頼みだ。

水落圭介は無下に断ることはできなかった。

「わかりました。やってみます」

「そうか！ありがとう」

佐藤編集長は立ち上がって、圭介の両肩に手を伸ばした。

「その島の資料はありますか？」

「勿論だ」

佐藤編集長は傍らにある、うず高く積まれている資料の中からバインダーで閉じられた冊子を取り出した。

その拍子に、数冊の資料が床に落ちたが、  
佐藤編集長は気にも留めず、言葉を続けた。

「これが桜井君に提出された資料のコピーだ」

水落圭介は手渡された資料をパラパラとめくった。

何枚かの写真もレイアウトされている。

どこかの漁港の写真と、遠目から撮影したと思われる、例の島の写真だ。

圭介は資料を見ているうちに、興味を持ち始めた。

その島の名前が奇妙だったのだ。

その島の名は〈名無しの島〉と記されていた――。